

〔論 説〕

東北地方における中世城館の歴史地理学的研究

― 秋田地方の場合 ―

三 浦 鉄 郎

一、はしがき

わが国の中世紀は、荘園制度が次第に崩壊し、守護大名や名主層が発生し、中世末期から戦国時代にかけて、いわゆる戦国大名が成立した時期である。戦国大名の性格は、領国内の国人・土豪の所領を全て大名の給与地であるとし、その表高を基準として、一定の軍役・公事・反銭・夫役などを課し、彼等を家臣とした。

中世の守護大名や名主層は、近世大名のように、組織的・集中的な統一的権力、または直接かつ単一的に農民を支配する体制をもたなかった点異なる。このような中世的背景のもとにおける秋田地方の城館の構築と城下町形成の地域的位置づけを試みたい。

二、主たる研究資料の検討

中世城館の研究で、最も至難なことは、適格な資料が得がたいことである。特に東北地方においてそうである。

本研究で主たるよりどころとした資料は次にあげる著書と地図類である。

- (1) 柞山峯之嵐（岡見知愛著）

秋田藩境目奉行岡見知愛が文化二年（一八〇五）に書いたもので、知愛が藩内の土形調査のため巡回し、中世城館については、所在地の地形状況、領主及びその城館に関する歴史的事項などが記述され、信ぴょう性がある。

- (2) 檜山町絵図（秋田県庁蔵）

この絵図は、享保絵図で、秋田藩が幕府に差し出した地図で、かなり詳しく書かれていて、檜山城やその城下町の構成を知る唯一のものである。

- (3) 角館城見取図（角館図書館蔵）

本図は、門脇賢一郎によって作成されたものである。本図に示されてある城館の構成や城下町の位置などは、今現地に足を入れると氏の調査が、いかに適性であるかがうかがえる。

- (4) 本堂城実測平面図

本堂城跡の調査にあたって、昭和十一年（一九三六年）八月一日に佐藤佐によって実測作成されたもので、城館の規模や構造が正確に把握できる。

- (5) 土崎湊嘉永記年図（青木保蔵所有）

江戸末期の絵図であるが、中世城館の位置や城下町の形態などを知るよい資料である。

三、城館の分布と立地

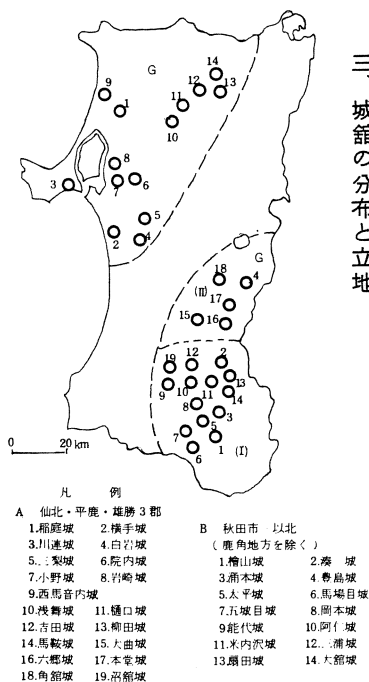


図 1 主要城館の分布

## (1) 城館の分布

城館の分布は図1に示す通りである。ただし、由利地区と鹿角地区は除外した。

A地区(横手盆地)のIグループは、小野寺氏の一族、重臣の拠城である。小野寺氏は、関東地方において成長した東国武士で、弘長(一二六一―六三)年間から文永(一二六四―七四)の初年頃に雄勝郡に移住し、南北朝時代には、相当な勢力を得、東北地方の武将としての基盤は、鎌倉時代の後期にできあがった<sup>①</sup>。

IIグループの白岩氏、前田氏、六郷氏、本堂氏、戸沢氏は、一応小野寺氏の配下にぞくしながらも独立的立場をとった。

B地区(秋田平野・米代川流域)は、全て安東氏(三浦氏)の一族、重臣の拠城である。安東氏は鎌倉時代に津軽地方の十三湊を中心之地頭的地位にあつて勢力をはっていた豪族で、南北朝以後に日本海沿岸を南下して、秋田地方に入り、秋田郡の小鹿島、湊を含む一帯の地域を支配した。

安東氏は檜山に根拠をおいた檜山安東氏と湊に根拠をおいた湊安東氏の二大対立の形勢で、両安東氏とも、この状況は一五世紀の中葉とされている。天正一十七年(一五八九)には、檜山城を湊に移し、秋田城介を名乗り、秋田郡・檜山郡・比内郡を、その支配下におさめた<sup>②</sup>。

## (2) 城館の立地と形態

城館とは、一般に城とその外、周囲の山河を含める場合が多い。そして外敵の侵攻から守るための防御施設のことである。

原田伴彦によれば、中世の城館はその初期はいわゆる「城堅固の

城」の時代で、特殊な要害の地形を利用して、峻険な山頂などに築城されたので、城下町はほとんど発展しなかったが、室町時代や戦国時代になると、商品経済の発達、大名領地の拡大、軍団組織の整備などの理由から、築城地点が領国の政治経済の中心地、交通の要地などの平野部に進出移動するようになり、近世城郭のような「国堅固の城」ではなく、それへの過渡期の形態と考えられる「所堅固の城」で、ある枢要地点の丘陵や河川を利用して構築されるのが一般であるとしている<sup>③</sup>。

秋田地方における築城もその例外ではない。図1に示した城館を地形立地の立場から大別すると次のようになる。

### A地区(番号は図中に記したもの)

- (a) 丘陵、台地―①稲庭城、②横手城、③川連城、⑤三梨城、⑥院内城、⑦小野城、⑧岩崎城、⑨西馬音内城、⑪樋口城、⑬柳田城、⑭馬鞍城、④白岩城、⑯六郷城、⑰角館城
- (b) 沖積原―⑮大曲城、⑱沼館城
- (c) 扇状地―⑩浅舞城、⑫吉田城、⑬本堂城

### B地区(番号は図中に記したもの)

- (a) 丘陵、台地―①檜山城、③本城、④豊島城、⑤太平城、⑥馬場目城、⑦五城目城、⑧岡本城、⑨能代城、⑩阿仁城、⑪米内沢城、⑫三浦城、⑬扇田城、⑭大館城
- (b) 河口―②湊城

さらに形態上からすれば、丘陵や台地に立地する山城は、二七を数え、平地に立地する平城は、僅かに六を数えるにすぎない。

#### 四、城館の構成と地形利用

城館は、外敵の侵入を防御することが目的であるから、その構成は、立地点の地形を城館構成の最大の要素として、功みに利用して、その目的にかなうようにしなければならぬことはいうまでもない。本稿では、山城の好例として、檜山城・角館城、平城の好例として、本堂城・湊城についてそれぞれ述べよう。

##### (1) 檜山城(図2)

安東氏が津輕十三湊の地から秋田地方に入ったことは既述した。檜山城は一五世紀の末頃に、安東忠季によって構築された。

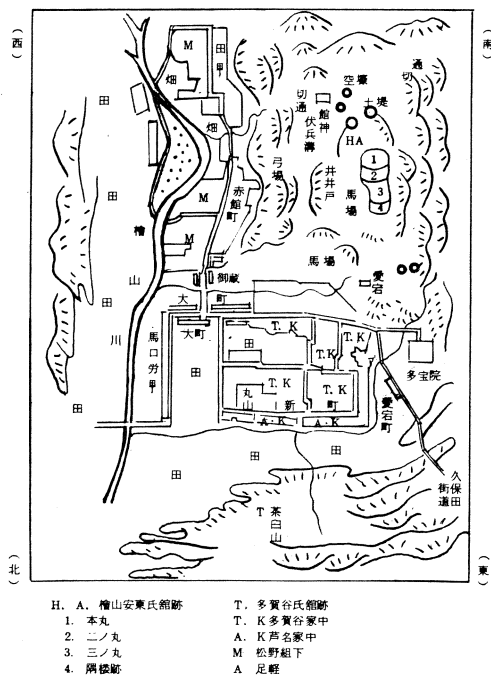


図2 享保年間の檜山町(秋田県庁蔵より)

檜山城跡付近の地形は出羽山地の一部分、母体国有林と谷地沢国有林から発源する檜山川が丘陵中に狭い谷をつくって、北西方を下する米代川本流と東能代付近で合している。

檜山城跡の立地する丘陵(標高一六一m)は、檜山川の谷中に発達する道路と志戸橋洪積台地上に開発された旧街道との交差点に形成された檜山町の背面山地にあたる。その山形は、大きな馬蹄型地形の様相を呈し、このような地形を利用した檜山城をエゾ館式馬蹄形の典型的城館と称されている。

(1) 構成—本丸、二ノ丸、三ノ丸から成る。

(2) 作事—丘陵中央部の標高一四五mに本丸がおかれ、その南面に一段低く二ノ丸、さらに一段下って三ノ丸(武者だまり)、最前線にあたって物見櫓が設けられ、ここからは、米代川下流地域が手に取るように眺望がきく。築城に欠くことの不可能な泉は、本丸の西側にあって、人工と思われる長方形の石枠が現存する。馬蹄形の峰は、僅かに一五〇m位であるが、谷が深く峻険そのものであって、難攻不落の言が適格である。

(3) 土工—①空濠(本丸の東側の緩斜面に空濠が数個みられ、中には濠の上に土塁を築いたものもある。この点は峰一つ越すと、檜山川の谷に発達する小沢口部落へ容易に通ずることができるので、防壁上特に意を用いたものであろう。西側正面の三ノ丸、隅楼にいたる斜面に、土橋切通しと称する空濠がある。これは城館本拠を防ぐ目的であったにちがいない。)、②待伏穴(空濠の内側における山地や台地に大小の凹地が在在するが、おそらく伏兵戦用であったらう。)、③段状の築造(城館周囲の峰や台地には、回廊上の段状

の構築が施されてある。これは城館内の連絡通路であつたのみならず、作戦上の「カラクリ」を仕かけるのに使用されたものではあるまいか。二ノ丸、三ノ丸にみられる段状構築は、見事というほかはない。④（本丸からの見通しの悪い地点には、見張用の「トリデ」を構えた。檜山中学校裏側の丘陵にある砦は、その跡が今なおよくわかる。⑤）要するに、檜山城館の構成は本拠地点の本丸が馬蹄型地形の中央部におかれ、これを取り巻いて馬蹄型内側の急斜面があり、その上最も危険視される地点には空濠を掘り、また待伏穴を築造し、峰や台地には伝達用兼カラクリ用の段状地を構えるなど、「エゾ館式馬蹄型城館」の性格を表現している。そして北方には、米代川、丘陵直下には檜山川が流れ、最前線の防御線を形成している。

## (2) 角館城

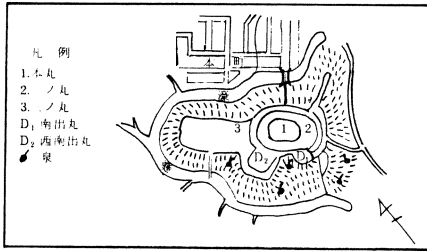


図 3 角館城の見取図  
(門脇賢一郎氏作、角館図書館蔵)

戸沢氏の角館地方への進出は、判然としないが、応永年間説(三九四―一四二七)と天文年間説(一五四〇―四五五)とある。いずれにせよ、戸沢氏が、南部岩手から秋田仙北郡に入ったことは事実である。角館城は、横手盆地北部の第三紀分離丘陵である古城山に建造された中世末期の典型的

表 1 檜山城と角館城との比較

項目 城	構 成 要 素						形 態
	地 形	領主の館	段 状 地	濠	待伏穴	水	
檜山城	1. 檜山丘陵の馬蹄形地形の利用 2. 米代川と檜山川	1. 本丸 2. 二ノ丸 3. 三ノ丸	城館の峰や台地に回廊状の段状地を構築(カラクリ作戦に利用)	領主の館を中心に前面と後方に空濠を築造	空濠の周辺に構築	城館からの展望地に築く	エゾ館式馬蹄形の城館
角館城	1. 姥杉山の孤立丘陵の利用 2. 檜木内川・院内川	1. 本丸 2. 二ノ丸 3. 三ノ丸	領主の館を中心に回廊状の段状地を構築(カラクリ作戦に利用)	院内川からの引水による水濠の築造	なし	全	山城兼水城

な山城であることは、前述の檜山城の場合と同様である。その機構を現存する山地形と図3「角館城の見取図」とからみると、最上の標高一六八mの第一台地は本丸で、これを取り囲んで第二台地があるが、これが二ノ丸、その外側に第三台地の三ノ丸があり、さらに南側に半長円の台地がある。西側には軍営をもつ西出丸・南出丸がある。これらの出丸からは展望がきき、砦(物見トリデ)として利用されたであろう。

北側の舌状台地は、軍営・倉庫・兵糧庫・役所などが配置されたところであるから、城館の心臓部の役を果すべき地点であるが故に、当然砦として利用されたに違いない。飲料水は山麓の数カ所にある湧泉に依存した。この山城の山麓には、院内川からの引水による水濠が、北東と北西にめぐらされ、完全な山城兼水城の形態をとっている。

要するに、角館城は西側に檜木内川、北方に院内川を、それぞれ控え、さらに山城の外郭には水濠をめぐらし、横

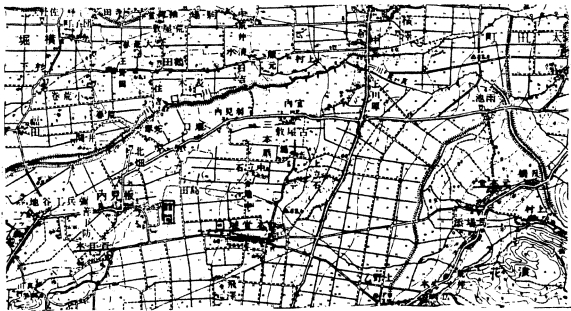


図4 本堂付近 (五万分ノ一、六郷図幅・国土地理院)

手盆地北部平野に孤立する古城山の丘陵利用と相俟って、極めて堅固な城館であった。次に檜山城と角館城とを構成要素である地形・領主の館・段状地・濠・待伏穴・砦(物見トリデ)・飲料水・形態などについて比較すると、表1の通りである。

檜山城と角館城との大きな相異は、防御上から前者は空濠を、後者は水濠をもつてし、また形態や性格上からは、檜山城がエゾ館式馬蹄形の山城であるのに対して、角館城は山城兼水城である点である。檜山城はエゾ館式であることは、檜山安東氏が津軽における抗争の経験から得た築城法であろう。

### (3) 本堂城 (図4・5)

本堂氏は、上本堂(元本堂)、下本堂(城回)を、本拠とした豪族で、陸奥国和賀郡から移住し、その時期は室町時代の初期頃とされている。戦国時代には、伊勢守忠親・茂親の二代にあたる。

本堂城は、はじめ室町時代の初期、当地仙北郡の真昼断層崖下の真昼川と、その支流に挟まれた細長い丘陵地を利用した山城である。(図4)

その後、本堂氏の勢力伸張に伴い、天文四年(一五三五)に、

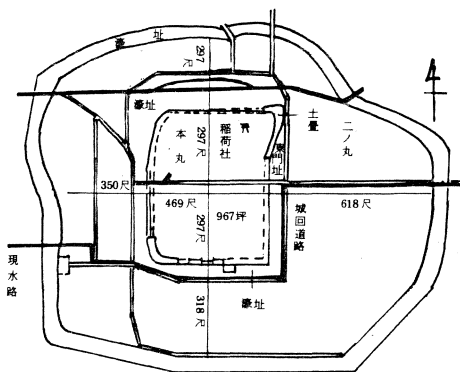


図5 本堂城跡 (200万分の1原図より佐藤氏実測図)

墨がぬぐられ、その一部分が北東から南西部にかけて残存する。なお外濠と内濠が、整然と配されていたことも知られる。この内・外の濠は、今は耕地整理によって失われた。要するに本堂城は、河川利用の水濠と土塁による水城である。

真昼川扇状地末端部の館ノ間付近に平城を築いて移転した。その構成は図5「本堂城実測平面図」で見ると、本丸の面積は三〇・八八<sup>8</sup>m<sup>2</sup>で東門・西門・南門があつて、その門跡が今なお明らかである。また本丸の周囲に土

### (4) 湊城 (図6)

津軽安東氏が秋田地方に入ってから、内訌によって檜山安東氏と湊安東氏の二大勢力が対立した。湊安東氏の根拠地は、湊城である。その位置は現在の土崎駅前神明社の地点であつた。地形的には雄物の川の川口で砂地である。

土崎の古図として、元文の地図、弘化三年の地図(川口家所蔵)、土崎湊嘉永記念図(青木保蔵所蔵)の三葉があるが、湊城の位置の

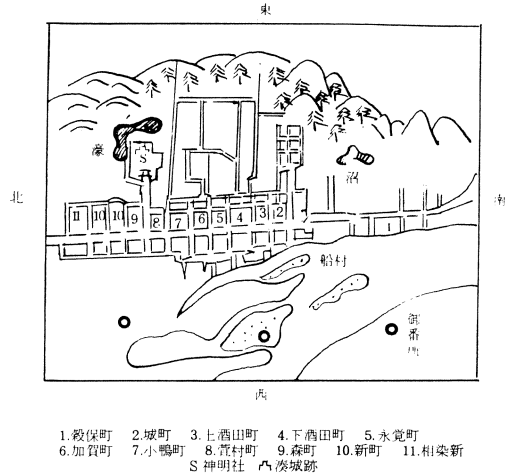


図 6 土崎湊嘉永紀年図

て北東にわたつて鍵状に水濠の存在が認められる。地籍図（秋田市役所土崎支所々蔵）にも明記されている。以上述べた本堂城と湊城の二平城は、唯一の防御線として水濠を構えていることは共通点である。

## 五、城下町の成立とその時代

### (1) 檜山城下町

檜山城下町は、室町期（一五世紀中）中葉に、檜山城を構築した安東忠季によつて計画、建設された。城下町は図2でわかるように、檜山川の北方、松山城の立地する丘陵をバックに南方に形成され、領主を中心とする支配者と防衛の武士団は、城館の左右に居住し（屋敷跡）、その他の人々は、北方の母体に居住したらしい。町造りの年代は不明であるが、田町、赤館町ができると、母体からの

移住が行われ、天正一七年（一五八九）、戦国期の安東実季時代には略々現在の町並に近い状態まで整えられたものと考えられる。<sup>(8)</sup>元和六年（一六二〇）檜山城が、破却され安東氏にかわつて、佐竹氏の縁戚にあたる多賀谷氏が支配者となり、檜山城跡から北西にあたる台地状の茶北山に館を構えた。<sup>(9)</sup>

町割は「羽陰温故誌」によると、新町（二四〇間）・亀堂町（一三〇間）、赤館町（三〇二間）、田町（九五間）、足軽町（一五〇間）、下夕町・倍臣町（一三六間）、高町・愛宕町（一〇七間）、大町（一七八間）、馬口旁町（一三九間）となっている。さらに「檜山在住者土族氏名調」<sup>(11)</sup>には、多賀谷家々中七六六、多賀谷支配（御組下）六四人、その内訳は、新町に一三人、赤館町に三七人、田町に一四人と記されている。以上の町に足軽町・倍臣町を含めて内町と称し、その他の町は外町と称した。檜山町は多賀谷氏時に入つて、近世的城下町として出発することになる。

### (2) 角館城下町（図3）

角館城下町は前述の通り、中世末期に角館城を築造した戸沢氏によつて形成された。すなわち、古城山（角館城築造の丘陵）北方山麓の水濠と院内川との中間低地につくられ、大手門は、本丸から北東に向つて設けられ本道に架せられた橋のたもとに設けられた。現存地名の本町（もとまち）<sup>(12)</sup>は、市町で商人の居住地であつたらしい。城廻は、給人屋敷であつたろう。

「天正検地目録」によれば、戸沢氏にぞくする郷村数四三、知行高四四、三五〇石、土率は約一、五〇〇人、百姓は四、四三五世帯となる。戸沢氏の経済的基盤地域は、城館から北方の檜木内川流域と、

玉川流域におかれ、前者は金山に後者は森林に大きく依存した。つまり両河川の合流点である谷口に城館と城下町を構成したことは、経済的には勿論、軍事的にも意義が深い。慶長七年（一六〇二）佐竹義宣が秋田に入部し、戸沢氏は常陸松岡へ転封され、翌八年（一六〇三）義宣の弟、芦名氏が一五、〇〇〇石の知行を与えられて、角館城主となる。芦名は角館城の正面を戸沢氏時代の北面から南面に移し、さらに城の位置を山麓へと移して、近世的城下町の町割を施行した。

### (3) 湊城下町（図6）

湊城下町の形成は、湊安東氏の成立の一五世紀中頃（一四四二）にはじまる。現存する穀保町のところに、後城（うしろじょう）、城町（じょうまち）、馬口労町（ばくろうまち）などの字名が残存する。恐らく安東氏時代の武士屋敷であろう。また湊城の北西側に当って、一騎町と称する地名があるが、一騎当千の侍の居住地で、いわゆる「御家中屋敷」である。

安東実季の「知行目録」<sup>(13)</sup>（天正一九年正月）によると、町を形成しているのは、檜山と戸島の二つの町だけであって、土崎の記載はない。したがって、当時の湊は一つのまとまった町ではなく、小部落であったと考えられ、そこがいわゆる町人の町であったろう。

また、戦国の戦乱をさけて、加賀国から五カ寺、河内国から一カ寺、摂津国から一カ寺などの寺院が転移し、さらに北陸地方や山形の日本海沿岸地方から移住した人々によって、酒田町・加賀町が成立し、湊町の基礎がつくられた。湊安東氏の経済的重要機能を果たしたことは否定できない。

近世期になって、久保田城（佐竹義宣）が完成すると、武士・寺院が久保田城下に移り、湊町地域には空地が多くなり、そのうえ町人のみとなったので、新しく町割が施行され、蒜町、萱村町、小鴨町、加賀町、永覚町、上・下両酒田町、新城町などの区割が判然となった。これらの町を総称して湊八町とよび、湊の中心街を形成した。これより湊町は秋田藩の外港として経済の一大源泉となった。

### (4) 本堂城下町（図4・5）

本堂城下町は、天文四年（一五三五）本堂寺館（館間）に平城を構えてから町割がなされ、その位置は城館東方約1kmはなれた扇状地の湧泉地を選んだ。今の本堂城回の地である。当時の残象地名と思われるものを、地形図からひろうと、本堂城回、館間、飛沢、百目木などがある。地形図にはないが、字名として残存するのは、館、北館、八目川、一本杉、道尻吉清水、後町、宿田、嶋の腰、観音堂、城方小屋、田町、森崎、馬場、仲の町、横町、本堂町など一六を数える。以上の地名から当城下町の形成を判断すると、館、北館、館間は、城館の位置を表わし、二ノ丸は重臣の居住地、北館・館間は、一般武士の居住地であつたろう。いずれも城館を中心にした付近に居住地が設けられた。

後町、田町、仲の町、横町、本堂町などが、本堂城回内にみられることは、本堂城回は、純然たる町人の町であつたことが窺える。

また信仰の中心として、馬場の稻荷明神、田町の神明社、仲の町の大日如来、後町の八幡宮、北館の観音堂、寺館の稻荷明神、百目木の雷神、吉清水の善証寺などがあつた。<sup>(14)</sup>近世になると、佐竹氏の支配下にぞくし、多くの社寺が、六郷城下町にまとめられ、人家や町

人・百姓が減少した。<sup>(15)</sup>

## 六、地域的位置付け（表2）

(1) 檜山城は、出羽山地位北部における日本海岸沿いの金光寺や志戸橋によって代表される洪積台地に続く要害性の丘陵地を利用したエゾ館式馬蹄形の典型的山城である。城館の前面に檜山川の谷を、はるか北方に米代川を要し、東・西・南の三方は山地にかこまれ、山と川によって防衛できる絶好の地形的位置にある。城下町は山麓につくられ、当初は檜山川沿いの小沢口に近い母体に武士を居住させたが、後に交通を考え、城館の北西部の丘陵を切り開き、羽州街道に短距離で連絡し得る地点に町割をし、城下町を形成した。そして、米代川流域に支城を置き、領国体制を整え、経済的には米代川流域の森林資源と鉱山資源をおさめ、さらに能代湊を交易の核として、檜山安東氏は米代川流域を基盤に戦国大名へと成長した。近世になると、城下町は多賀谷氏により再び町割がなされ、近世城下町として発展する。

(2) 角館城館は、横手盆地北部の分離丘陵を利用した山城であるが、水濠をめぐらしてある点から、水城の性格をもつ。城館の前面である北西方に、檜木内川と院内川が流下し、東南方は山地によって、完全に遮断された要害の地である。そのうえ、檜木内川と院内川の両谷の合する交通上の要地でもある。檜木内川や院内川の両流域は、戸沢氏の穀倉地であるばかりでなく、木材や砂金の産に恵まれた地域である。かかる地域的優越性が、戸沢氏をして北方の雄安東氏、南方の雄小野寺氏によく抗し得た原因であつたらう。

城下町は、本町（庶民の居住地）と城廻（武士の居住地）とから

表 2 檜山、角館、湊、本堂の城下町の対比

城下町	時期	歴史的核(館)	地形的位置	城下町の形成とその変遷		
				位置	構成要素	機能の変容
檜山町	中世 1443	檜山安東氏の館	丘陵(山城)	山麓	武家・社寺・庶民	武家の居住地割が施行された。
	近世	多賀谷氏の館	"	"	"	再度の町割により、内町と外町の区分がなされた。
角館町	中世 1423	戸沢氏の館	丘陵(山城)	山麓	"	本町(庶民町)と城廻(武家屋敷)が形成された。
	近世	芦名・佐竹両氏の館	"	"	"	芦名氏により、城館の南側低地に新しく町割がなされ近世城下町の基ができた。その後佐竹氏が継承す。
湊町	中世 1442	藩安東氏の館	川口(平城)	川口の低地	"	城町(武家屋敷)と馬口(労働、舟付場、酒田町、加賀町(商人町)が形成された。
	近世	佐竹氏の支配	"	"	"	久保田城完成後、新しく町割をし、純然たる湊町が形成された。
本堂町	中世 1535	本堂氏の館	扇状地(平城)	扇状地末端	"	武家屋敷と町人屋敷の地割がなされた。
	近世	佐竹氏の支配	"	"	"	六疊城下町に社寺の多くが移転し、町人、百姓が減少した。

なり、近世になって、城館南面の檜木内川と玉川とによる沖積原に新たに町割を施行し、佐竹氏時代にいたって立派な城下町が形成された。

(3) 湊城は、雄物川の河口付近に、旧雄物川の河跡湖をたくみに利用して防衛線とした平城である。檜山安東氏が、山城を構えたのに対し、湊安東氏は海岸を求めて、湊を中心とする経済交易に重点をおいたことはよいコントラストである。

城下町は武士の居住地である城町・後城と商人の居住地である酒田町・加賀町と湊と三つの要素から形成され、商業活動に主点のあったことはいうまでもない。湊は、雄物川流域を後背地にもち、北海道、関西方面を前方地域として発展したのであろう。特に近世に入ってから、久保田の



外港、また西廻り航路の要として、裏日本における重要な港として格付けされた。

(4) 本堂城は、横手盆地北部の真昼断層崖下の川口川扇状地の扇頂部にあたる断層崖上にあった山城から、扇央の乏水地をさけて、湧水に恵まれた扇端部の館間付近に築城された平城で、二重の水濠をめぐらした点で水城の性格をもつ。本堂氏が、戦国期における領国体制を整えるには、まず経済的に扇状地の湧水を利用して開発の進めやすい地点、交通的には角館街道の要地、軍事的、政治的に白岩氏、戸沢氏、六郷氏、前田氏などの諸豪族に対する中央的位置、これらの点を考慮すると、城館の位置が、館間付近が最良ということになる。城下町である本堂城回は、武家屋敷と町人屋敷とからなっていた。近世になって、佐竹氏の支配下に入ると、多くの社寺が六郷町に移転し、町人・百姓が次第にその数が減少した。

### 七、むすび

東北地方に關東武士が定着し、在地領主として勢力を伸張し、発展するにいたったのは、大体鎌倉末期と思考される。これより東北地方が新時代を迎えるが、同時に秋田地方の中世期の開幕でもある。關東系武士は、雄勝郡に土着した小野寺氏、比内に土着した浅利氏がある。地方系武士は、安東氏・戸沢氏・本堂氏……などである。彼等はその領域内に一族・重臣を配して防衛体制を整えながら開発に努力した。開発面では、鎌倉武士団の移住による開発と現地土豪による開発と二重構造的性格をもつものといえる。

中世期における城館の一つは、鎌倉時代の守護地頭の配置による支配体制からくる山城、他の一つは、室町―戦国時代にかけての攻

撃と防衛の二面性をもつ城館である。本稿で取扱った城館は、いずれも後者にぞくし、檜山城館や角館城館は、天然の要害に人工を加えた堅固な山城で上杉氏の春日山城、畠山氏の七尾城などに匹敵する。

湊城館や本堂城館は、平城で河川を巧みに利用して、水濠をめぐらし、そのうえ土塁を築くなど天然の要害に劣らぬ程、人工を加え補強した。また領域は夫々分割統治の形をとっているから、その面積は、必ずしも広くはないので、領域開発に力を入れる必要があった。したがって、城館の位置は、軍事的考慮のほか、政治的、経済的、交通的面をも考慮して選定された。特に経済活動に留意し、城下町を平地に形成した。したがって、城館と城下町とは、ある距離間隔がたもたれた。

「本研究は、一九七六年日本地理学会春季学術大会において発表した要旨にその後の研究を加えたものである。現地調査に際しては河田駒蔵氏や後松州造氏のご教示を得たことを感謝す。なお私学研修福祉会の研究費によることを付記す。」

(聖霊女子短期大学)

### 注

- (1) 秋田県『秋田県史』第一巻、古代・中世編 一九六二年  
三九〇―三九二頁。
- (2) 前掲(1) 四一六―四四一頁。
- (3) 原田伴彦『歴史地理講座第三巻』一九五七年 九一―九六頁。
- (4) 秋田魁新報「檜山城と安東氏」 一九七七年 二月八日付。

- (5) 河田駒雄氏（檜山町在住、郷土史家）による。
- (6) 前掲（1）四二〇頁。
- (7) 千畑村公民館『本堂公特集』一九七二年 三三一四六頁。
- (8) 能代市編さん委員会『能代史稿第二輯』近世上 一九七一  
一九九頁。
- (9) 前掲（8）。
- (10) 歴史図書社『羽陰温故誌』四（新秋田叢書四） 一九七  
年 一二八頁。
- (11) 前掲（10）一二九頁。
- (12) 秋田県『秋田県史資料』古代・中世編 一九六一年 三  
八九―四〇四頁。
- (13) 前掲（12）四〇九―一五頁。
- (14) 前掲（7）二二―二三頁。
- (15)

A STUDY ON THE HISTORICAL GEOGRAPHY OF THE MIDDLE  
AGES CASTLES ON TOHOKU DISTRICT, JAPAN  
THE COUNTY OF AKITA

Tetsuro Miura

This paper is a trial essay on the regional position for the foundation of the castles and the castle-towns of Akita.

The Middle Ages in the Tōhoku District begin when Kantō-Samurais came to settle down in the areas in the Late Kamakura period, which also means the beginning of the Middle Ages in Akita. The lords of the territories who were called Onodera, Andō, Tozawa, Hondō and Hokugō, were from the most famous powerful-families in those clays of Akita, they built a castle in their own territories and made great efforts for the reclamation of their areas.

Specially in this study I stated about the castles and castle-towns constructed by the above-mentioned powerful-families in the period from the Muromachi Age to the Sengoku Age. One of the characteristics of the construction of the castles was in the point making good use of mountains or rivers, and as the territory was narrow they had to strive for the reclamation, and the sites of the castle-towns were selected with consideration for the politics, economy and traffic in the area.